

2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部 子ども発達学科	教授	水野 伸子
最終学歴	学位	専門分野
京都市立芸術大学大学院 音楽研究科 音楽学領域 博士(後期)課程修了	博士(音楽学)	音楽心理学, 音楽教育学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画(方法)

【理念】

保育や教育現場の今日的課題に対応できる知識・技術および論理的思考力の育成

【目標】

- ① ICT を活用した音楽教育の手法を開発する
- ② 論理的に思考し記述する能力を育成する
- ③ 学生の音楽表現における実践力を育成する

【方針】

音楽の授業科目全てにおいて、音楽的な表現力と論理的思考力とをバランスよく育成する。

【計画(方法)】

ICT を活用した授業においては、DAW ソフト **GarageBand** を用いて DTM による音楽編集を行う。さらに DTM の作業を通して音楽編集の基礎となる音楽理論やアレンジの手法などについても指導する。論理的な思考力は1段落を構成する「200字作文」の取り組みを頻繁に行い、個別の添削指導により文章力や word のスキルも合わせて育成する。学生の音楽表現における実践力は音楽会の取り組みを通して育成し、「個人の音楽性の追求」と「子ども達が音楽を楽しむ工夫」の両観点から検証しながら進める。

○担当科目(前期・後期)

(前期)

音楽と社会, 音楽科教育法, 音楽基礎, 音楽表現技術特別演習, 専門演習Ⅰ, 専門演習Ⅲ, 幼児と音楽表現

(後期)

専門演習Ⅱ, 専門演習Ⅳ, 卒業研究, 保育内容(音楽表現)

○教育方法の実践

① ICT を活用した音楽教育手法の開発

名古屋市などの小学校ではタブレット端末が小学1年生から1人1台支給され、授業で活用されている。このような状況を踏まえ、「音楽科教育法」の授業では音楽編集ソフト **GarageBand** を用い、小学校の各学年での使用方法を例示して実際に体験した。自作マニュアルに沿ってタブレットの鍵盤やコード譜, ドラムセットをタッチすることで手軽に音楽作りができ、高度な演奏スキルを必要としない。音やリズムを作って楽しんだのちに、最終段階として一人ひとりが教科書教材から1曲を選び合奏編曲に取り組み、その発表までを行なった。今年度は特に、編曲の構成や打楽器のリズム(ボサノヴァやラテンなど)に重点を置き、マニュアルを修正して指導をした。自分の描き

たい音楽を楽器のパートを重ねて一人で完成させ、みんなで聞き合う。この一連の作業で学生は音楽の知識を貪欲に吸収し、実際に音を出して試行錯誤する中で音楽的な感覚も培っていく。音楽全般にわたる多くのことを学ぶDTMは、将来子どもたちの音楽を指導する立場に就く学生にとって有意義な学びであるといえよう。今後も、保育者・教育者養成校でのタブレット端末を用いたDTMを継続し、効果的な教育法を模索していきたい。

② 論理的に思考し記述する能力の育成

スマートフォンを常時に携帯し情報を簡単に取得できる現代の若者にとって、「考える」経験は多いとは言えない。論理的な思考と文章力の育成を、特に「専門演習Ⅰ，Ⅱ」「専門演習Ⅲ，Ⅳ」の授業で取り組んだ。「専門演習Ⅰ，Ⅱ」では、レポートや論文の最小単位である段落の構成を身につけることを目的に「200字作文」を継続して指導している。一つの話題を200字で収まるように「話題の提示または結論」「補強（説明，原因，事例）」「まとめ，結論」からなる一段落で構成する。学生から提出された作文は随時添削して返し、改善点を示した。毎回の授業の宿題としたことで、論文等で使用する言語も自ずと身につけていく。「200字作文」指導を昨年度より継続している成果が、今年度の4年生の卒業論文で表れ、どの学生も副査の教員から高い評価を得た。次年度は3年次より、書いた内容を発表する場も設定しミニプレゼン能力も合わせて指導したい。

③ 学生の音楽表現における実践力の育成

「専門演習Ⅲ，Ⅳ」で取り組む子ども対象の音楽会活動も2年目に入り、今年度は計4箇所（幼稚園，保育園，子ども食堂等）で開催した。新聞で報道された記事をきっかけに幼稚園の創立イベントに呼ばれるなど活動が軌道に乗った。学生たちは創作劇を取り入れ楽しい雰囲気の中で演奏し、リリック要素も取り入れながら幼児の発達段階に則した内容になるよう話し合いを重ねた。合奏はゼミの楽器編成（サクソ，ホルン，トランペット，打楽器，グロッケン，三味線）に合わせて編曲された。こうした一連の音楽会に向けた活動がほぼ学生の手で行われたことは、この2年間の経験を糧にして音楽会を構成する能力や音楽表現力が各自に培われた表れであろう。活動を開始した昨年度当初は、ゼミのメンバー間の意見の不一致などからまとまりに欠け、教員が関与することも多かった。今年度後期からは全員が音楽会の成功という目的を最優先して良好な関係を構築する努力も認められ、それに伴い合奏するメンバーの息も揃い演奏レベルが上がった。昨年度に課題として残された「個人の演奏技術の鍛錬と音楽性の追求」と「子ども達が音楽を楽しむ工夫」は、個人の演奏努力と創作立体紙芝居を取り入れるなどの工夫から、学生自身で解決していった。2年間継続した音楽会の活動は、学生の成長に大きく寄与したと考えられる。教員は合奏のピアノ伴奏等を担当し、学生の演奏を補助した。

○作成した教科書・教材

「音楽基礎」：段階ごとの演奏動画教材

「音楽科教育法」：DTMによる音楽編集マニュアル

○自己評価

目標ごとに自己評価を行う。①について、タブレット端末を用いた合奏編曲は、楽器演奏の熟達度と比例することなく学生の音楽性を耕やすツールになることが授業実践から確認された。音楽理論の指導や音楽的感性の修練にも効果的に働くことが示唆され、今後もタブレット端末の良さを活かした授業を継続して行っていきたい。②の200字作文実践について、当初は多くの学生が段落を意識せず、1つの段落にいくつもの話題を盛り込んだり、説明が長すぎて200字を大幅に超えてしまったりした。回数を重ねるごとに1つの段落に一つの内容を書く意識が定着し、段落の構成にも

配慮して 200 字でまとめられるようになった。しかし、構成について十分に習熟しているとは言えず、論文執筆の基本である段落構成の継続した指導が必要である。③について、学生による音楽会を 2 年間継続した経験から学生自身が音楽的にも人間的にも成長したことが確認できた。今後も指導の工夫を重ね、学生自らが成長する音楽会の実践を模索していきたい。

II 研究活動

○研究課題

音楽の同期を取る行為がもたらす演奏者と聴取者の間の相互作用の解析

○目標・計画

【目標】

音楽の同期実験を行い、データを分析する。

【計画】

実験デザインを検討し、使用する音響機材の選定および配線等の実験システムの決定後に、音楽同期実験を実施する。データを音響解析し分析に着手する。

○2017 年 4 月から 2025 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・水野伸子, 石井玲子ほか『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版, 第 2 章 第 2 節 乳幼児の「表現」の発達特性と発達過程, pp.23-24, 2020 年度
- ・水野伸子, 横井志保ほか『表現（新・保育実践を支える）』福村出版, pp.81-87, 2018 年度
- ・水野伸子「はじめに」『学校音楽教育実践論集 第 8 号』日本学校音楽教育実践学会, 2025 年度

（学術論文）

- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, Effects of Auditory Feedback on the Synchronization between a Performer and the Audience, The 17th International Conference on Music Perception and Cognition e-Proceedings, pp. 198-203, 2023.
- ・水野伸子「演奏者と聴衆の間の同期の解析：音響情報の双方向性がもたらす効果」令和 4 年度博士論文, 京都市立芸術大学大学院（全 105 ページ）, 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と『聴衆』間の聴覚情報の双方向性が同期に与える影響」（査読有）, 音楽知覚認知研究 28(1), 日本音楽知覚認知学会, pp.3-19, 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と「聴衆」間の聴覚フィードバックの有無による手拍子同期の比較」情報処理学会研究報告 Vol.2022-MUS-134 No.9(IPSJ SIG Technical Report, Vol.2022-SLP-142 No.9) pp.1-6, 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「拍知覚における演奏者－聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会令和 1 年度秋季研究発表会資料, 日本音楽知覚認知学会, pp.55-58, 2020 年度
- ・水野伸子, 津崎実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」（査読有）音楽教育学第 49 巻第 2 号, 日本音楽教育学会, pp.1-12, 2019 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」日本音楽知覚認知学会平成 30 年度秋季研究発表会資料, pp.78-81, 2018 年度
- ・水野伸子「生演奏と DVD 再生演奏による音楽聴取時における手拍子同期の解析比較」（査読有）音楽教育学第 47 巻第 2 号, 日本音楽教育学会, pp.13-24, 2017 年度

(学会発表)

- ・水野伸子「演奏者と聴衆の間の相互作用—同期や同調を促すパラメータに着目して—」日本音楽教育学会第 55 回大会 (玉川大学), 2025 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と聴衆の間の同期: 制御機構に注目して」日本音楽教育学会第 54 回大会 (弘前大学), 2023 年度
- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, Effects of Auditory Feedback on the Synchronization between a Performer and the Audience, The 17th International Conference on Music Perception and Cognition, The College of Art, Nihon University, Japan, August 24-28, 2023.
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と『聴衆』間の同期に曲による違いが生じる要因の検討」日本音楽教育学会第 52 回大会 (ZOOM 開催), 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と『聴衆』間の聴覚フィードバックの有無による手拍子同期の比較」音学シンポジウム 2022 (第 131 回音楽情報科学研究会・第 137 回音声言語情報処理研究会共催研究会), 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と『聴衆』間の聴覚情報の双方向性が同期に与える影響」第 32 回音楽の科学研究会, 2022 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「音楽聴取時における演奏の拍と聴取者の手拍子による相互同調の分析」日本音楽教育学会第 51 回大会 (ZOOM 開催) 2021 年度水野伸子, 津崎 実「拍知覚における演奏者—聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会令和 1 年度秋季研究発表会 (ZOOM 開催), 2020 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「音楽聴取時における演奏者—聴取者間の相互作用による同時性の解析」日本音楽教育学会第 50 回大会 (ZOOM 開催), 2020 年度
- ・水野伸子, 津崎 実「拍知覚における演奏者—聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会令和 1 年度秋季研究発表会 (ZOOM 開催), 2020 年度
- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, The Perception of the Musical Beat among Japanese Young Children: Aspects of the Degree of Synchrony, International Symposium on Performance Science, Melbourne Conservatorium of Music, 2019 July 19.
- ・水野伸子「幼児期における拍の知覚発達: 音楽聴取時の手拍子同期度による検討」日本音楽教育学会第 48 回大会 (岡山大学), 2018 年度
- ・水野伸子, 津崎実「幼児期における拍知覚の発達: 同期度による検討」日本音楽知覚認知学会平成 30 年度秋季研究発表会 (龍谷大学), 2018 年度

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況, 交付状況 (学内外)

令和 5 年~令和 7 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (課題番号: 23K02420)「音楽の同期を取る行為がもたらす演奏者—『聴衆』間の相互作用の解析」(研究代表者 水野伸子)

○所属学会

日本音楽教育学会, 日本音楽知覚認知学会, 日本教育工学会, 日本学校音楽教育実践学会, 日本保育学会

○自己評価

今年度は科学研究費補助金による研究 (基盤研究 C (課題番号: 23K02420, 代表者 水野伸子)

の実験システムを決定し、予備実験ののち本実験を実施することが最大の目標であった。筆者らの先行研究では演奏者と聴衆を対象に集団実験を行ってきた。今回は演奏者と聴き手という2者間の個別実験であることから、新たに実験システムを構築する必要があった。予備実験を繰り返して使用する音響機器や配線図等を決定したのち、本実験となる個別実験を合計52名の協力を得て実施した。聴覚フィードバックの双方向条件と単方向条件を入れ替えた2実験を各ペアで行ったことから26ペアによる合計52試行の実験データを得ることができた。

その一方で、内外の先行研究を調査して研究課題である演奏者と聴衆の相互作用を導き出すパラメータを整理した。演奏者と聴衆の間の相互作用は、音楽を活動と捉える **Musicking** を前提に周期性の知覚と運動、双方向の情報伝達とフィードバック制御、演奏者の動きなどの視覚的要素がパラメータとなって誘発されることが示唆され、これを日本音楽教育学会の全国大会で口頭発表した。当日は非常に多くの聴講者が集まり、演奏者と聴衆の間の相互作用は演奏家・音楽教育者ともに重大な関心事項であるとともに、コロナ禍を経た現代の音楽文化や音楽教育に求められる研究課題であることが示唆された。次年度は実験で得たデータを分析する。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

教育学部執行部の一員として、学部長をサポートし学部の円滑な運営に寄与できるように努める。入試委員会の副委員長として、大学の入試業務を遂行する。大学で充実した学生生活を送り勉学に励もうとする意識のある学生の入学を推進する。

【計画】

執行部の一員として、学部長を中心とし学部長補佐とともに学部の円滑な運営に努力する。入試委員会の仕事としては年間を通しての入試業務、大学共通テストのサポート業務を行う。

○学内委員等

教育学部執行部，教育学部部会，入試委員会，相談員

○自己評価

教育学執行部の一員として、学部長を中心とした円滑な学部運営に努力した。入試委員会副委員長として筆記試験の主監督業務、AO入試小論文の問題作成や採点業務を行うなど入学試験が円滑に運営されるように努めた。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

保育者・教育者の研修や試験業務に関わり社会に貢献する。

【計画】

保育士資格試験採点委員（7月，12月）

○学会活動等

7月と12月に名古屋芸術大学で実施された保育士資格試験の採点委員を務めた。

○地域連携・社会貢献等

ゼミの学生とともに、トワイライトスクール，学童保育所，幼稚園，保育園，子ども食堂で音楽会や手作り楽器のワークショップを開催し，発達段階に応じた音楽の楽しみ方の啓発に努めた。

○自己評価

全国保育士試験において採点委員を務め、僅かながらも貢献することができた。

V その他の特記事項（学外研究，受賞歴，国際学術交流，自己研鑽等）

自身のピアノ演奏力の研鑽にも努め，社会貢献活動を行う。

VI 総括

今年度は，研究において，科学研究費補助金による研究（基盤研究 C（課題番号：23K02420，代表者 水野伸子）の実験システムを構築し本実験を実施することが主目的であった。次年度以降に分析を進め音楽知覚認知に関する研究を継続し，その成果を学内の授業や社会へ貢献することで還元していきたい。

以 上